

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

金融トピックス (98 / 4)

3月末のドレッシング

今はもうやっていないだろうが、かつて銀行は期末預金残高を膨らませるために、期末時に取引先企業に他行の小切手を切らせた。相手銀行には自行の小切手を同額入金し、期初に同時に落とす方法で「ドレ」(ドレッシングの略)と呼んでいた。ないものがあるように見せかけるお化粧のことで頼まれた覚えのある経営者もおられるだろう。

先3月末の金融をめぐる動きをみてふとこの昔の言葉を思い出した。実体をより良く見せるためにあらゆる手段を行使した金融界は、この先、実体はどう変わったかを問われることになる。そして、これからの問いは重く厳しいものになるに違いない。

「特損合戦」のその後は?

98年3月期の上場企業決算は、まるで「損出し競争」を見る思いだ。有力企業が次々と巨額の特別損失を表に出し最終的に大幅赤字を計上する。そうした「特損合戦」が毎日のように報道されるのを見て、「いよいよ最終局面に近づいているな」と感じる。

マーケットは既にそれらを折り込み済みであるが、問題は個別企業に最終局面を乗り越える力があるかどうかである。それは大企業・中小企業を問わず訪れている試練である。

銀行貸出残高、減少率過去最大

3月末の銀行貸出残高は、対前月末比で3.4%と過去最大の減少率を記録したという。都銀を中心に貸出を絞ったのが原因のようだ。

日銀のデータによると、金融5業態(都銀、長信銀、信託、地銀、第二地銀)の貸出残高は3月平残で526兆円、対前年比1.6%の減少となっているが、私はいつもこの金額に注目してきた。国内総生産に匹敵するこの銀行融資残高は、なによりも過剰融資の証である。

ビッグバンが直接金融に軸足を移すことを意味するならば、銀行が貸出を削減圧縮するのはある意味では自然の動きである。このことは常に頭に入れておくべきだ。

預金保険機構、増員

預金保険機構が再び人員を増やすようだ。新

聞によると、今年夏までに300人増やし大阪にも支部を開設するという。

この動きは、行政府が銀行の更なる破綻を想定して準備を進めていること状況証拠と見ていい。もっと言えば、日本の金融システムが競争の激しい国際資本市場に組み込まれようとしており、押し寄せる変革の波には勝てないと当局が認識していることを間接的に現していると見ることができる。

PER(株価収益率)、算出不能!

東証1部上場企業の98年3月期決算数字が毎日のように下方修正され、4月初め遂に全企業トータルの損益がマイナスとなってしまった。金融界中心の巨額赤字計上はその大きな要因であるが、その結果1株当りの利益がマイナスになってしまい、全銘柄の予想PERが算出不能という状態に陥ってしまった。

正に前代未聞の出来事である。

企業間信用、縮小傾向強まる

企業の資金調達の一形態である企業間信用(掛取引や手形取引)は、企業の財務力の向上等もあり従来からも縮小傾向にあったが、昨今の信用不安の増大を背景に縮小傾向を一段と鮮明にしている。

工作機械メーカーの動きはそれを象徴的に行っている。有力メーカーである森精機製作所や池貝は、取引商社との取引慣行を見直し全面的に現金決済に切り替えている。資金回収までの期間を短縮して資金効率を高めるためばかりではなく、債権回収リスクを軽減するのが主たる目的のようだ。

リスクを商社に負わせることが可能な有力メーカーならではのの変更であるが、今後こうした信用収縮の動きが多方面に波及するとすれば、資金面で経済活動に大きな影響を及ぼす可能性があるため注意が必要である。

海の向こうの合併劇

今月、米国で大手金融機関の相次ぐ合併が報道された。海の向こうの出来事であるが、日本の大手金融機関経営者はかなりのショックを受けたであろうことは想像に難くない。

マネーのグローバルな流れは益々巨大化し、様々な不安定を作り出して行くだろう。